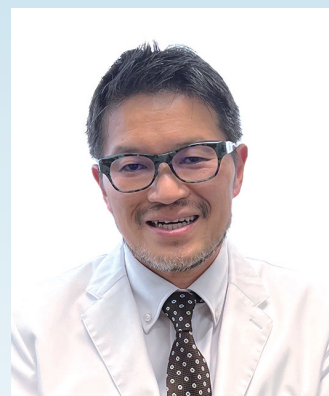


羅針盤

杉田 和成

Kazunari Sugita

佐賀大学医学部内科学講座 皮膚科 教授



皮膚を通じて全身をみる

筆者がフレッシュャーズのころは、医者になって1年目から入局する流れであったので、産業医科大学を卒業後、そのまま産業医大の皮膚科に入局した。もちろん、初期臨床研修は皮膚科 only という道もあったが、他科をローテーションすることがはしりのころでもあり、内科と小児科に派遣していただいた。その間、救急疾患をたくさん経験させていただいた。初期研修医のころは、急患がくると、患者をみようという意欲的な友人がこぞって集まってくるような雰囲気であった。

良き友人や同期に恵まれたフレッシュャーズ時代を過ごせたのは幸せであった。フレッシュャーズのころはわからないことが多いのは当然であり、湧き上がる臨床でのさまざまな疑問に耳を傾け、フィードバックしてくださった指導者との出会いも、その後の皮膚科医人生に大きなインパクトを与えている。フレッシュャーズにとって、友人や指導医との出会いを大切に研さんに努めていただきたいと思う。

さて、時は2021年に進む。筆者は、ちょうどCOVID-19が猛威を振るっていて、コロナワクチン接種が始まって間もないころ、現在の職を拝命した。当科は内科学講座のメンバーであるが、それは、形式的ということではなく、かなり本格的である。本格的というのは、内科的な

素養を身につけ全身管理に長けた皮膚科医ということである。私は、これまで、医局のメンバーがCOVID-19病棟での診療、熱傷、壊死性筋膜炎など、現場から逃げずにチームとして果敢に取り組んでいる姿をみてきた。皮膚はデルマドロームという言葉に表されるように、全身とは決して無関係ではない。そのため、皮膚とそれ以外の臓器との関連を考えていくという病態把握は皮膚に関わるすべての医者にとって必須である。したがって、皮膚を通じて全身にアプローチできることは、皮膚科医としてのスキルアップだけではなく、医療の現場において洞察力を高めることにもつながる。

フレッシュャーズは外来や当直で救急疾患や重症例にふれる機会が多いと思う。換言すれば、それは、何ものにも代え難い貴重な機会と捉えることもできる。本特集は、第一線でご活躍中のエキスパートの先生方から救急疾患、重症例、進行例を中心に解説いただいた。そのため、現在、救急や重症例、進行例にふれる機会の少ない方にとっても、そうした現状を知っていただけるものと思う。本書が、皮膚科医療の広がりを実感いただく一助となることで、われわれ皮膚科医同士の理解が深まり、ひいては皮膚科の魅力アップにつながっていくものと考えている。